

Face to Face



TICOは保健医療・農村開発などの分野で、アフリカ・アジアで支援活動を行っている国際協力NPO法人です。

地球規模の問題に苦しむ人たちの自立支援を共同作業により実施し、そこで学んだ経験と知識を地域の人々とわかち合い、私たち自身のライフスタイルを振り返るとともに、地域の精神文化の昂揚に寄与することを目的としています。

TICO 季刊ニュースレター

No.38 2014年10月号

ザンビア 母子保健プロジェクト

2014年4月から開始したプロジェクトについて、報告します。

👉p.2-3

ムワブラ報告

母子保健プロジェクトの新事業地となるムワブラについて、報告します。

👉p.4

ザンビア基金進捗報告

皆様からご支援いただいた寄付金の使途について、報告します。

👉p.5

ザンビア体験記

今年の夏、ザンビアを訪れた学生たちが感じたそれぞれの思いを紹介します。

👉p.6



笑顔がステキなモンボシ村のカリミナ小学校に通う生徒たち。TICOでは、教員住宅建設費用の一部を支援しています。（5ページ参照）

チサンバ郡 総合的な農村母子保健

杉本 尊史（保健医療専門家）

モンボシ地域の出張健診について、日本と比べたときの特徴を見ながら、TICOが実施している事業の内容を説明します。

特徴1

3ヶ月健診、1才半健診のような年齢毎ではなく、村の5才未満の子どもが一斉に集まり、妊婦健診も同時に行われる。

いわば胎児から5才までが一斉に集合する場なので、お母さんは妊娠時から、自分の子どもがこの先どのような保健サービスを受けるのかが自然に分かります。また、その場で行われる健康教育教室は、広くお母さんに伝わるので効率がよく、かつ他に情報源のない彼女たちにとってとても貴重です。TICOはここを地域の教育機会と位置づけて、後に述べるように住民ボランティアたちを通して、単なる個人の健診以上の効果をもたらしたいと考えています。

特徴2

健診の項目は、体重測定だけである。



血液検査や発達を見る診察はおろか、聴診や身長計測もありません。吊り下げ式の体重計で体重を測ったら（写真右上）、それをお母さんが持っているカードの成長曲線上に記入して、そのグラフに異常がないかどうかを判断します。異常があれば、それが医学的な介入を必要とするものなのか、日頃の生活の中に何か問題はないのか、そもそも日々何をどれくらい食べているのか、そのようなとても重要な判断と問診（カウンセリング）を住民ボランティアたちが行います。そのトレーニングのためのカウンセリング研修（右下の記事参照）をTICOは8月に実施しました。研修後は村々の出張健診に赴いて、彼らのカウンセリングの様子を見守っています。

特徴3

毎月の村の健診を実施するのは、住民ボランティア（つまり無給の無資格者）である。

最大の特徴と言ってもいいかもしれません。無給無資格ながらも彼らの業務は、前述した体重測定と記録、カウンセリングのみならず、結果の集計、異常があった子どもの家庭訪問、有資格者である診療所のスタッフの移動手段や食事の手配、日程の案内、健康教育教室、報告書作成など多岐に渡ります。保健に関しては素人かもしれませんが村の生活のエキスパートである彼らと、地域のためにできることをTICOは一緒に考えています。

例えば、マケニ村の健診では、ボランティアたちが下痢と衛生についての劇を披露しました。カムロブエ村は、健診が行われる小学校に簡易手洗い設備を設置しました（写真右下）。ムブンドゥ村は、健診に来たお母さんたちに離乳食の調理の実演をしてみせました。チャブシャ村は、よりよい健診のために自分たちで互いに教え合うことを始めました。

このような取り組みの例を積み重ねて、彼らの経験知を育てていきたいと思います。



①棒を足で踏むと、
②タンクが傾いて水が出ます。

特徴4

健診と予防接種がセットになっている。

ボランティアたちが予防接種の適応時期と判断した子どもには、診療所スタッフ（有資格者）が実際に注射を行います。また、妊婦健診もスタッフの仕事です。この健診が、ボランティアたちにとって医療機関から専門的なサポートを受けられる機会にもなるように、TICOは診療所と協働しています。

特徴5

たいてい青空の下で実施される。

TICOのモンボシ地域での活動は、地道な、文字通り草の根の活動と言えます。広い青空の下、母子保健がしっかりと根づいてくれることを、新しいプロジェクトでは目指しています。



出張健診でのカウンセリングの様子



出張健診に栄養

カトウンドウ 麻里（栄養専門家）

これまでの出張健診では、成長が順調でない子どもがいても、お母さんの抱える子育ての悩みや食生活での問題を積極的に聞き取る機会がありませんでした。そこで健診中にカウンセリングコーナーを設け、成長が順調でない子どもの食事や生活について、ボランティアとお母さんが話をすることにしました。

しかし、多くの住民ボランティアたちはカウンセリングの内容や方法について学んだ事がなく、「何を話したら良いのかわからない」「自分には分からない事をお母さんから質問されたらどうしよう」と戸惑い気味。また、地域で長く活躍してカウンセリングに関する知識と経験を持つ住民ボランティアたちは、カウンセリングとは正しい知識を一方的にお母さんに伝えることだという意識が強く見られました。→3ページにつづく。



▲実際のカウンセリングの様子



▲熱がないか触って確かめます。

を支える”地域力”強化事業



皆の意見を聞きながら、活動計画を練り上げていきます。

竹村 俊男（コミュニティ活動専門家）

先の出張検診（2ページ参照）は、それぞれの地域住民で組織されている住民保健委員会が実施しています。

冷たい風が吹く7月の冬のモンボシで、出張座談会を行いました。モンボシ地域には10の住民保健委員会があり（2014年10月時点）、プロジェクトの開始以来、住民保健委員会の会議や出張健診などの場を通じて、彼らの活動について話し合いを行ってきました。しかしながら、彼らが考える活動上の課題は、「必要な物品/交通手段がない」、「金銭的なサポートがない」などモノの不足に関する

カウンセリングを導入

今回の研修では、どのような質問をすれば、知りたい答えが返ってくるのかという点に注目しました。「子どもとは毎日どのくらい一緒に過ごしているの？母乳は1日何回あげている？」など、具体的な質問をできるように練習を繰り返しました。

「母乳を1日に6回？どうしてそんなに少ない回数なんだ？」

「その聞き方は、お母さんを責めているように聞こえるわ。」

つつい追求する癖が出てしまうベテランボランティアに、他のボランティアがアドバイスする場面も。

また、私たち日本人スタッフが住民ボランティアから教えてもらうことも少なくありません。

「村では1日1〜2食しか料理しない家族が多いけれど、5歳以下の子どもたちは3食と間食が必要です。本当にそんな食事ができるのかな？」と質問すると、「朝の料理の残り火でサツマイモを蒸しておくの良い」「ピーナッツを入れたお粥なら、手間をかけずに作れると思う」など住民ボランティアならではのアイデアがたくさん出てきました。そして、若い男性ボランティアたちも女性ボランティアたちから学ぶ事が多かったようです。

研修前のカウンセリングでは、ボランティアが話してばかりでお母さんは静かに聞いている事が多かったのですが、研修後、カウンセリングコーナーではお母さん達の話し声がたくさん聞かれるようになりました。カウンセリングを通して、住民ボランティアはお母さんや子どもの生活を最もよく知る身近なサポーターになろうと頑張っています。

るものばかり。彼らが課題の全体像を把握しているとは言い難い状況でした。

そこで、「住民保健委員会の現状と理想との差を把握し、今後の活動計画の策定の準備をすること」を目的に、本座談会を実施しました。まずは、住民保健委員会の能力を測定するために、質問票に記入して自己採点してもらいました。この質問票は郡保健局と診療所のスタッフと協働して作成したものです。その後、質問票の結果で浮き上がった課題の中から一つのテーマを決めてもらい、議論してもらいました。「活動的でないメンバーが多い」、「診療所への報告書が提出されていない」「住民保健委員会の役割を正しく理解していない」など、座談会前とは違った角度から自分たちの課題を認識できたようです。

翌8月には、住民保健委員会を一つずつ訪問し、彼らが活動計画を策定するための会議を行いました。住民保健委員会メンバーとの話し合いを通じて、活動計画に盛り込むべきテーマを絞り込んでいきます。出来上がった活動計画は、「学校のトイレに手洗い場を作る」「家庭訪問して住民の健康上の問題を把握する」

「出張健診で施設分娩に関する啓発を行う」など、住民保健委員会によって様々な内容になりました。これまでも活動計画は存在しましたが、計画が漠然としているために結局実行されないことがありました。会議では、活動計画を一つずつ「手順」に落とし込み、それぞれの手順ごとに「責任者」「連絡を取るべき関係者」「必要な資源」「期限」をしっかりと設定することを心がけてもらいました。

せっかく出来上がった計画も、作りっぱなしでは意味がありません。計画が実際に実行されているのか、その進捗を確認することが大切です。9月に再びそれぞれの住民保健委員会を訪問。あまり順調に進んでいない住民保健委員会については、対策を話し合い、より実行しやすいように活動計画を見直しました。10月からは計画の実施が本格的に始まりますが、住民保健委員会が「課題認識→活動計画の策定→実施（進捗確認）→活動計画の修正」という過程を繰り返し経験する中で、地域住民の健康を守るためにより貢献できる存在になっていくことを期待しています。



村の現状を把握するため、地図を作成中。

2014年4月から開始されている本事業は、JICA（国際協力機構）から「草の根技術協力事業」として委託を受けて実施しています。

ムワプラ☆報告

出浦 綾香（インターン）



ムワプラ診療所



出張健診の様子



ボランティアさんたち

チサンバ郡ムワプラ地区は推定1万2千人が住む、周囲を丘に囲まれた農村地区です。2011年に診療所が開設し、1名の助産師が住民ボランティアと共に、電気や水道が通っていない環境の中で人々の健康を守っています。TICOではこの地区でも母子保健のプロジェクトを展開し（2,3ページ参照）、より多くの妊娠さんが安全で質の高い周産期ケアを受けることができ、乳幼児が健康に成長することができる地域づくりを目指し活動していく予定です。

ムワプラ地区では、診療所に行きたくても交通手段が少なく、施設分娩の重要性があまり認識されていないことや、診療所も電気がないため夜間のお産を受け付けることができないなど、様々な理由から多くの妊婦さんが不衛生な環境の中、自宅で出産しています。また乳幼児に関しても、ワクチン不足から定期的な予防接種が受けられない、出張健診が開かれている場所へのアクセスが悪い、両親が正しい栄養の知識を持っておらず適切な食事がとれていない、などの課題があります。

「8人子どもを産みただけで、そのうち2人は出産の時に亡くなってしまったの。理由はわからないけれど、生まれた時には冷たくなっていたわ。みんな自宅分娩だった。今妊娠している子も自宅で産もうと思ってる。この子はちゃんと産まれてくるよう神様に祈っているの。」

ある村のお母さんはこう話してくれました。

妊産婦死亡比や5歳児未満死亡率が未だ高いザンビアでは、診療所の医療スタッフのみならず郡保健局と連携を取っていく事や、住民ボランティアと共に活動し、包括的にその地域に介入していく事が必要不可欠です。

TICOは郡保健局と診療所、そして地域住民をつなぎ、プロジェクトを通して、一人でも多くの妊婦さんと子どもが健康で暮らせるよう、力を合わせて活動をしていきます。

モンボシストリーム
FacetoFace版

ある新月の日のモンボシ村の夜空です。無数とも言える星々に思わず目を奪われました。しかし、ものの本によれば、星は全宇宙に存在する物質のうちのわずか6分の1でしかなく、その意味で脇役でしかありません。そして6分の5を占める宇宙の主演は、未だ発見されていない目に見えない物質だそうです。

目に見えるものが決して全てではないこと、遠く目に見えないものを正しく知ろうとすること、そして、それが今立っている場所であると知って、さらに感動が大きくなりました。

杉本@ザンビア事務所

モンボシストリームは、TICO公式facebookで連載されているモンボシ村の情報記事です。是非、facebookからもお楽しみください。

TICO公式facebookはこちらまで→

ticohq

検索



ザンビア募金☆進捗報告

瀬戸口 千佳（業務調整員）

新たに3件の支援が決定！！

出張健診用の小屋建設（ンジョブ村）【予算：約13万円】

TICOが活動しているモンボシ地域では各地域で毎月1回の出張健診が行われています（2ページ参照）。他の村では学校で実施されることが多いのですが、ンジョブ村には学校がないため、丸太を組んだ簡単な小屋で健診が行われていました。ただ年月が経つにつれ風化し、今年からは妊婦健診用のスペースが使用不可能な状態に。現在では妊婦さんは草むらに隠れるようにして、地べたに寝転がって健診を受けています。

実はンジョブ村では3年前から、レンガ造りの小屋を建設するために郡保健局へ資材の予算を陳情をしてきましたが、待てど暮らせど梨のつぶて。それでも村の人たちは少しずつレンガを焼いて準備してきました。



村の人たちが作った小屋
（というか木の枠・・・）



建設を担うンジョブ村住民保健
委員会のメンバーたち



ンジョブ村での出張健診の様子（木枠は右側）

カリミナ小学校 教員用住宅の建設（資材の一部支援） （カリミナ村）【予算：約9万円】

1年生から7年生まで計317名が通うカリミナ小学校には、5人の有資格教員がいますが、そのうちきちんとした「家」に住んでいるのは2人のみ。残りの3人は教室や狭い事務室に住んでいるという状況で、地域の人たちが自弁で教員たちのための住宅を建設していたのですが、2軒目に入った時点で行き詰まり、支援への要請が上がってきました。

とはいえ、カリミナ小学校は公立校として認定されており、他のコミュニティスクールと呼ばれる学校に比べれば恵まれていると言えます。よって本支援は全額支援ではなく、資材の一部を支援することで合意しました。



住民たちが自前で建てた教員用
住宅1軒目

マサカ・コミュニティスクール 教員用住宅の建設（マサカ村）【予算：約7万5千円】

マサカ・コミュニティスクールは、左下のカリミナ小学校とは違って地域の有志が運営しています。現在、1名の有資格教員と3名の地域の有志によって1年生から7年生までを教えています。教育の質向上のため、追加での有資格教員派遣を希望しています。

写真の家屋はPTAが中心となって、2012年1月から建設が始まったのですが、あと1歩のところで資金が切れ、1年以上野ざらし状態でした。



あと一歩のところで止まったまま
の建設



PTAのメンバー

橋の建設（NPO法人道普請人/京都大学との連携）【予算：約16万5千円※】

本事業は道普請人理事長で京都大学大学院工学部研究科教授である木村先生の指導の下、院生である芝村裕人さんが担当。8月に現地入りされ、村の人たちと建設現場の横でキャンプ生活をしながら建設を進めています。

※TICO負担分として。本事業は、道普請人、TICO、そして住民有志による建設委員会が、事前に合意された分担に基づき、共同出資して行われています。



建設作業を住民に指示している芝村さん（左）と、最初の1か月間助っ人で来てくださった大東さん（右）



橋台（マケニ村）

橋台（ルピア村）

橋脚

橋全体のイメージ

「ザンビア募金（住民提案型支援）」として頂戴した寄付は以上の事業支援で全額使用させていただきましたが、地域からの新規要望受け付けは引き続き実施します。変わらぬご支援をお願いいたします。「ザンビア」と指定の上、ご寄付ください。

IFMSA

徳島大学薬学部2年 小田幸弘

「したいことをすればいい。ご飯も食べただけ食べて、悩みがあれば討論をして、眠たくなったら寝る。何もとらわれる必要はないんだ、フレキシブルなんだよ。」滞在先のお父さんはよくこう言っていました。

“人の幸せ”という、答えも出そうにないテーマをいつの間にか頭の中で考えていました。私なりの答えが見つかるまではまだ時間がかかりそうですが、今後の人生において、かけがえのない貴重な経験になったことは間違いありません。

IFMSA

徳島大学医学科5年 田村聡至

地域のボランティアの方々とお話を伺うと、地域の健康状態を向上させたい、医療に興味があるなどと熱心な方ばかりで、一生懸命頑張ってるのがよく分かりました。ただ、もともと医療関係者ではない方々が乳幼児健診をするというのはやはり難しいのだなと感じることもありました。

どこの医療機関も深刻な医療従事者と薬などの物質的な不足を抱えているようで、ザンビア全体の医療に大きく影を落としているように思いました。

ザンビア体験記

この夏も多くがTICOの活動地を訪れました。ビレッジステイや地域住民自らボランティアとして活動している出張健診などの見学を行いました。彼らの感想が届きましたので、ご紹介いたします。

*IFMSA（イフムサ）：国際医学生連盟－日本

TICOユース

徳島大学医学科6年 金子正憲

昨年度、TICOユースの自主活動で得られた収益金はTICOの活動地であるザンビア共和国モンボシ地区のモンボシ中学校へ通う子どもたちの奨学金支援に充てられました。そして、この夏、TICOユース代表としてザンビアを訪れ、モンボシの子どもたちとの交流が実現しました。

子どもたちとサッカーをしたり、実際に奨学生の家に泊まることもできました。

彼らのためにもTICOユースの活動を継続させていきます！



▲モンボシの子どもたちと。

大分大学医学部4年 渡辺大

「支援」という言葉自体、考えれば考えるほど難しい言葉です。ザンビアのように長い間平和を享受している国において、いったい人々が本当に必要としていることがなんなのか、実は「文化や習慣が違うから」という理解で良いことも多いのではないかと考えてしまいます。支援をするのは「先進国」から「途上国」というのが一般的だと思いますが、この二者の関係を規定しているのは経済です。「経済的に進んでいること」と、「国として進んでいること」を同じ意味に捉えていいのにかにも疑問が残ります。

以上のようなとりとめもない疑問にとらわれている状態ですが、今回見させていただいた「医療・健康」に関する活動については、おそらくこの人にもニーズがあり、1人でも命が助かることに価値があるのだと思います。

IFMSA

徳島大学医学部2年 高磯甫隆

滞在先のお父さんに「都会でなく村で暮らすメリットは何ですか？」と質問をすると、「村では学歴が必要ない」と答えてくれました。都会で仕事を得るには学歴が必要になるのですが、村では学校では習わない「農業・商売」を他の人から学ぶことで生きていくことができるのだそうです。そう言いながらも、学校を9年間しか通えなかったことを少し気にしているようにも見えました。

子どもへの教育は国の未来に対する最大の投資だと考えています。この問題に対して、村の方々がどう取り組むか、また自分は何かができるか、今後も考えていきたいと思っています。

IFMSA

徳島大学医学部保健学科3年 原田真理子

滞在先のお母さんはボランティアとして、主に月に1度の出張健診時に活動していると伺いました。しかし、それ以外にもマリリアにかかった住民がいればご家族に病状を確認しに行くなど、地域のボランティアとして地域住民の健康を守るんだという強い思いやボランティアとしての誇りを感じました。日本では薄れかけている地域への愛や住民同士のつながりの深さを実感し、私が忘れていた感覚だったように思いました。

ザンビアには日本のような物質的なゆとりはないかもしれませんが、日本では感じられにくい精神的なゆとりが他者とのかわりの中で築かれているように思いました。

新興感染症の流行について

TICO 代表 吉田 修

ついにデング熱が日本に上陸した。160人ほどが国内で感染したようだ。ヒトスジシマカ、ネッタイシマカなどの蚊に刺されることによって感染する。幸い初感染は重症化することはほとんどないが、何度も感染するとデング出血熱と呼ばれる重篤な病体に陥ることがある。世界では毎年5千万～1億人が感染し、その内50万人ほどが重症化、2万人ほどが死亡する。エボラ出血熱も世界を震撼させた。特にアメリカ国内での感染者が出て、先進国に人々にとって対岸の火事でないことが鮮明となった。死亡率が非常に高く、多くの医療従事者も犠牲になっている。

次に日本に上陸するのはマラリアかもしれない、と心配されている。マラリアは、最も恐ろしい感染症の一つであり、世界で毎年3～5億人が感染し、100～150万人が死亡する。特にサハラ以南のアフリカで深刻であり、今年はザンビアでも例年以上に大流行しているようだ。これもハマダラカという蚊が媒介する疾患である。この蚊も既に日本に生息している。

また、海外でマラリアに感染し帰国後発症する輸入マラリアは年間100人以上ある。SARSや新型インフルエンザの脅威も忘れてはならない。

さて、我々はどう対応すればいいのか？空港などでの水際作戦はもちろん重要である。旅行者は自己の健康管理に努めることは言うまでもない。しかし、様々な感染症の世界的な流行の根本的な原因を考えなければならない。途上国での医療の不備、環境・衛生・教育など予防面での不備もある。人、物の移動がますます多くなっていること、都市部における人口の密集も原因であろう。蚊が媒介する感染症に関しては地球温暖化も無視できない。

途上国での流行を食い止めるためには、国際的な取り組み、先進国の支援が不可欠である。マラリアを知る医師は日本にはほとんどおらず、これらの感染症の現場を知る医療従事者を育てることも必要であると思われる。（エボラ出血熱の様な死亡率の高い疾患に対して、命を賭けて現場を知れというのも酷ではあるが。）そして、地球温暖化問題に対する先進国の責任は非常に大きい。

10月の地球人カレッジで講師の藤野紀子さんが久しぶりに「セヴァン・カリスースズキ伝説のスピーチ」を聞かせてくださった。あれから22年、人類は進歩していない、耳の痛いスピーチであった。

「どうやって直すのか分からないものを、壊し続けるのはもうやめてください。」

セヴァン・カリスースズキ伝説のスピーチ
(1992リオのサミット)

www.youtube.com/watch?v=N0GsScywvx0



よしだ・おさむ：自称兼業農家（外科医）
徳島県出身。アフリカをはじめ世界各国にて国際医療支援活動を実施。現在吉野川市山川町のさくら診療所で地域医療を実践しながら、代表としてTICOを運営。
写真は、TICO合宿にて早朝より参加者と農作業に勤しむ様子。

着任の
ご挨拶

カトウンドウ 麻里
(栄養専門家)

初めまして！ カトウンドウ麻里です。

6月より、栄養専門家としてTICOザンビアチームに仲間入りしました。ザンビア出身の主人と2012年より首都ルサカで暮らしています。

村で暮らす人々の栄養状態を改善するーそれが彼らの生活を豊かにすることに繋がって欲しい。この「想い」を日本から応援して下さる皆様と一緒に形にしていけるよう頑張りたいと思います。

どうぞよろしくお願い致します。



▶ 出身は大阪。
最近、ご主人の英語にも大阪テイストが感じられるようになったとか。

着任の
ご挨拶

山崎 恵子
(インターン)

はじめまして。

特定非営利活動法人GLOW*の研修員としてTICOでインターンをさせて頂く看護師の山崎恵子と申します。

ザンビアへ行くのは初めてですが、現場ではまず相手の話を真っ直ぐ聞く事、そこで何が出来るか常に考えながら過ごしたいと思います。

よろしくお願い致します。



*国内外の医療・健康格差を改善するために志ある医療者への研修提供を行い、医療者不足の地域へ医師、看護師の紹介を行っている団体です。TICOは海外研修のフィールドとしてGLOWと提携しています。

離任の
ご挨拶

出浦 綾夏
(インターン)

この度、多くの経験と学びを得て4ヵ月のインターンを終了致しました。

診療所の業務や乳幼児健診での関わり、村でのホームステイを通し、村の人々と寝食を共にすることで、農村地区の生活の様子や直面する健康問題について理解を深める事が出来ました。

一人でも多くの妊婦さんが安全なお産を迎えられること、子ども達が健康に過ごせる地域になることを願っています。



▲村のお母さんと子どもたちと一緒に。

事務局長 福士庸二のつぶやき

エコ? エゴ?

近頃、ティッシュの使い方が、気になってしょうがない。たかが鼻水如きに何枚ものティッシュ。食べこぼしにもティッシュ。何でもティッシュ、ティッシュ、ティッシュ。

遠い昔に途上国での生活を経験してから、ティッシュを箱から取り出すたびに躊躇する性格になってしまった私には、どうしても気になる。

ティッシュやペーパータオルに限らず、レジ袋や通販の段ボール箱など周りを見渡せばどれだけの使い捨て商品があるのだろう。数え切れない、その多さに驚く。それらは限りある資源であることはもちろんのこと、多くのエネルギーを費やして製品化され、その過程で多くの温室効果ガスが排出されている。

一方で、街を歩けばエコの文字がアチラコチラに掲げられている。そして、ほとんどの人は何の迷いもなく使い捨て製品を手取る、そのような価値観とは一体なんなのだろうか? 私たちは幸運にも豊かな国に生まれたが、豊かさが故に、間違った価値観『ものさし』を身につけてしまっていないだろうか?

最近のニュースによれば、IPCC（国連の気候変動に関する政府間パネル）は、地球温暖化の悪影響を避けるためには「今世紀末に温室効果ガスの排出量をほぼゼロにする必要がある」と指摘したという。

待ったなしで今すぐ行動しなければ、間に合わないのである。

▶どちらも大切な資源。



ご支援ありがとうございました

TICOの国際協力活動は、皆様からの寄付金や会費によって支えられています。温かいご支援をお待ちしております。

寄付をいただいた方（書き損じハガキ含む）

原田恵子、TICOサポートクラブ、西愛正、船津まさえ、紙幸子、中村芳子、大室直子、原清、田淵幸一郎・千夏、さくら診療所、花井郁恵、阿部葆幸、合同会社Plan-B、中田隆子、瀧田成人、第7回公募合宿参加者一同、大久保洋一、河合純子、日浅芳一、唐住洲子、小原邦夫、原かゆら、中田美智子、福士庸二、吉田修、匿名6名

福井康雄、福井照実、鈴木薫、廣瀬文代、佐古和雄・友美、松田佳子、佐治朝子、吉田純、関谷晴孝、篠原隆史、砂田、田淵幸一郎・千夏、橋本浩一、三田理化工業(株)、高井美穂、瀧浩樹、津田道子、今心株式会社、木本豪、大室直子、中川朋子、浜垣伊津美、合同会社PlanB、峰尾武、山岡智互、表倉聖子、大橋瑞紀、杉本尊史、福士庸二・美幸、吉田修・益子、匿名1名

会員を更新された方

井原宏、酒巻栄子、田岡敬子、寺口美香、寺田由紀、中村純子、船津まさえ、峯裕恵、吉見千代、古川久美子、香西邦明、地造津根子、浮森和美、

新たに入会された方

渡部知美、渡辺大、笠井美由紀

●2014年7月1日分～2014年10月31日
●順不同、敬称略

TICOへのご寄付の方法

郵便振替 — 01640-6-37649（加入者名）TICO

銀行振込 — 四国銀行 山川支店（店番号344）
普通 0199692
特定非営利活動法人TICO
代表理事 吉田修

カナ入力の場合は、トクヒ）テイコ
募金箱 — さくら診療所（徳島県吉野川市）に常設しています。

インターネット — TICOウェブサイトのバナー広告をクリックして、そこからお買い物していただくと、代金の一部が寄付されます。詳しくはホームページをご覧ください。

書き損じはがきを集めています。

TICOへの入会方法

会員となって資金面からもTICOの活動をサポートしてくださる方を募集しています。会員の方には、TICOニュースレター“Face to Face”を毎月お送りいたします。

年会費

賛助会員	個人	¥12,000
	学生	¥6,000
	団体	¥15,000

正会員 ¥12,000

※通常は賛助会員でのご入会をお願いしています。総会での議決権を持つ正会員を希望される方は事前にご連絡下さい。

入会ご希望の方は、年会費を郵便振替にてお支払い下さい。郵便局備え付けの振替用紙で、次の口座へお願いいたします。

口座番号 01640-6-37649

加入者名 TICO

ご住所・ご氏名・お電話番号の他に、Eメールアドレスもお持ちでしたら通信欄にお書き添え下さい。

なお、ゆうちょ銀行自動引き落とし、クレジットカード払いも可能です。詳しくはホームページをご覧ください。

TICOニュースレター Face to Face 第38号

2014年10月発行 発行人：吉田 修
編集：近森 由記子

特定非営利活動法人 TICO 事務局

〒779-3403 徳島県吉野川市山川町前川120-4

電話：0883-42-2271（平日 9:30～18:30）

メール：info@tico.or.jp / ウェブサイト：www.tico.or.jp

facebook：www.facebook.com/ticoHQ